

二〇世紀初頭におけるドイツの右翼

インテリと政治

——メラ・バン・デン・ブルックを中心にして——

八 田 恭 昌

一

テオドル・ガイガー (Theodor Geiger) のように、インテリを、「自分の有する精神主義をもって人間性のより高度な形式だとする、精神貴族的立場に立つ傾向をもち、想定された人間社会の歴史的使命という名の下に、精神的なものに対するある種の畏敬を、一般大衆から要求する」ものと規定し、イエネー・クリューツ (Jeno Kruecz) のように、「多少とも実践から離れた立場から、われわれの社会存在を意味批判的に解釈し、かくて社会の精神的方向づけの要求をみたそうとする人々」と規定するならば、ここで問題にするメラは、このような精神貴族的姿勢とメシアニズムをもった典型的なインテリの例であろう。なぜならかれは、友人パウ・フェヒター (Paul Fechter) の言葉によれば、「時代に対する内的精神的結びつきから、民族とその形成に対する直接的全面的な結びつきへと上昇した、これらの人々のなかの最も純粋なタイプ」であつたからである。

インテリの政治に対する関わり方にはさまざまな類型が考えられる。

① インテリが、精神世界の原理をそのまま政治の世界にもち込もうとする場合。

② インテリが、政治の世界に関わりなく自分の精神世界に沈潜する場合。

③ インテリが、精神世界の自律性を放棄して、政治権力の前に敗北主義の姿勢をとる場合。

④ インテリが、精神の世界と政治の世界との原理の異質性を自覚しながら、③のように精神世界の自律性を放棄せず、②のようにノン・ポリにも落入らない場合。

⑤ 科学・技術インテリのように、インテリが、政治権力に奉仕し、これを合理化する場合。

もちろん現実には複雑で、このように簡単に図式化できるものでもなく、さらにまた、個々のインテリがいろいろ①、②、③、④、⑤の間を流動するケースも多い。トーマス・マンが②→④に移ったケースであるとすれば、ここで問題にするメラーは、②→①に転向したケースである。

ところでマルティーン・ルッターが、カトリシズムの外的政治権力に対抗して、内なる信仰の精神世界の原理をうち出したところからもあきらかなように、インテリのなじむこの精神（Geist）の世界と、政治権力（Macht）とが、たがいに鋭い悲劇的な対立緊張の関係におかれるのは、ルッター以外のドイツ思想史を流れるひとつの大きな特徴である。ドイツのインテリは、精神世界に沈潜すればするほど、マックス・シェーラーの指摘するよう^{（4）}に、「精神が〈純粹^{ガイスト}〉になればなるほど、それは、社会や歴史のなかで、ダイナミックな働きという意味では無力となる」という悲劇を味わわなければならない^{（4）}。なぜなら、ガイガーが述べているように、「理性の執行者としての権力^{マハット}は、永遠のユートピアである——権力の衛星としての理性は、それみずからのカリカチュアで

ある」⁽⁵⁾からである。このドイツの伝統的な精神と政治の亀裂に橋をかけようとして②→①に転向したメラーも

また、この「永遠のユートピア」の悲劇を味わわなければならなかったインテリの一人である。

- (1) Theodor Geiger, Aufgaben und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft, Stuttgart, 1949, S. 121.
- (2) Jent Kurnucz, Struktur und Funktion der Intelligenz während der Weimarer Republik, Grote, 1967, S. 8.
- (3) Paul Fechter, Moeller van den Bruck—ein politisches Schicksal, Berlin, 1934, S. 13.
- (4) Kurnucz, S. 27.
- (5) Geiger, S. 71.

二

アルトゥール・メラー・バン・デン・ブルック (Arthur Moeller van den Bruck) は、一八七六年プロシア・ラインラント地方のゾーリンゲンの町に生まれた。父親オトマール・ビクトール・メラー (Ottomar Victor Moeller) は、プロシア王室の建築監督官をつとめ、監守一人で牢獄全体が監視できる、当時としては非常に合理的な牢獄を設計した人である。ショーペンハウアーの熱心なファンで、メラーにもアルトゥールという名前をつけた。もともとメラー家はテューリンゲンのエアフルトの出であったが、メラーの祖父の代になって移転し、ハールツ地方のノルトハウゼンで地主になった。祖父の息子たちは、士官として一八六六年の普墺戦役や一八七〇年——七一年の普仏戦役に加わっている。このような家系は、後のメラーに見られるプロシア主義の思想形成に重要な意味をもつものである。しかしメラーの父親だけは、その兄弟たちとちがって軍人にはならず、建築師になり、プロシア王室の前建築監督官の娘エリトゼ・バン・デン・ブルック (Elise van den Bruck) というスペイン系オラン

大人の女性を嫁にもらい、メラーをもうけた。メラーの体内に外国人の血が流れているということも、かれのナシヨナリズムの感情形成を理解する上で見逃すことのできない一点である。

メラーが生れるとまもなく一家はデュセルドルフに移転し、かれはこの町のギムナージウムに通うことになる。両親はかれを軍人か法律家にすることを望んだが、かれは、両親に反逆し、かれらの期待に反した文筆家の人生を歩む。世代間の相克の問題は、十九世紀末から二〇世紀初頭にかけてドイツの若者たちの間に普遍的に見られる現象である。ビスマルクによる急速かつ徹底した近代化がもたらした人為的で機械的な社会体制の出現は、これに反発をおぼえる感受性の鋭い若者たちの心に、外的繁栄の蔭に潜む内的魂の貧困化の問題、政治^{ポリティクス}に対する精神の問題^{ガイスト}を突きつけずにはおかなかった。若い世代は、ビスマルクのつくったウィルヘルム帝制に対する問題の提起者であった。十九世紀末、ベルリン郊外のシュテグリッツでカール・フィッシャー(Karl Fischer)博士によって展開されはじめたウァンダーフォーゲル運動も、このドイツの市民社会状況におかれた若い世代の心の空洞感を突いて登場してきた運動であった。ウァンダーフォーゲル運動に関係し、表現主義の劇曲で旧世代を攻撃した若きアーノルト・ブロンネン(Arnold Bronnen)は、市民社会のなにもものによっても拘束されない衝動の自由を謳歌する——「国家、教授、家族、これらのすべては私にとって残忍な暴力となった。これらの暴力をうち砕くときのみ、私は野外に出ることができた」⁽¹⁾。「私はこの衝動的で推進的な爆薬を一杯に吸い込んだ。爆破が計画となった。家よりも爆弾、発展よりも破局だ」⁽²⁾。ニーチエ、フランク・ウェーデキント(Frank Wedekind)フランツ・ウェルフエル(Franz Werfel)、『ウァルター・ハーゼンクレーバー(Walter Hasenclever)らになじみ』、『われらの時代、われらの世界、われらの生活感情』を賛美した若き劇作家カール・ツックマイヤー(Carl Zuck-

mayer)も、ウェーデキント流に「今や私はもう家には帰らない」とボヘミヤンの氣持を謳いあげる⁽³⁾。

メラーも、この若い世代の生活感情とけっして無縁ではない。デュセルドルフのギムナージウムをかれは放校されている。画家ムンクの生き生きした生命を論じて、無味乾燥なギムナージウムの生活を対比的に皮肉ったかれの一文が、学校当局を刺戟したのがその原因である。芸術にかぶれたかれは、けっして型にはまった学校の優等生ではなかった。その後、かれはいろいろの大学で自由聴講してはいるが、正規の大学教育を受けることはついになかった。かれは、O・シュベングラーと同じように、講壇アカデミズムの外に立っていたインテリのタイプに属する。新保守主義とよばれるメラーの政治思想は、かかる独学のアマチュア・インテリという側面と同時に、このような若い世代の生活感情を抜きにしては語れない。非日常的なものへの感受性をもって、ウアイマー共和国の日常的通俗性を批判し、左右の力を結集して諸政党を越えた「新戦線」^{ノイエフロンテ}の結成を青年によびかけた⁽⁴⁾かれの後の代表作『第三の国』(Das Dritte Reich)は、当時の若い世代のバイブルとなったのである。

後に闘争的で男性的な世界観を強調することになるメラーが、その出発点において退廃した世紀末的芸術の風潮のなかに育ったことは、非常に興味深い。ライプツィヒにやってきたかれは、ここで象徴主義の草分けフランツ・エーベルス(Franz Evers)と知りあい、かれに金の無心をしたりしている。ヒトラーと同じように夢想家の常として、メラーは経済観念にとぼしく、金欠の割には金銭に無頓着なところがあり、入ればすぐに使ってしまう浪費家だったようである。一八九六年、ベルリンにやってきたメラーは、F・ウェーデキント、リヒャルト・デーメル(Richard Demmel)、スタニスラウ・ブシビシエフスキー(Stanislaw Przybyszewski)、デートレーフ・フォン・リーリエンクローン(Detlev von Liliencron)、マックス・ダウテンダイ(Max Dauthendey)、F・エーベル

スらの溜り場で一般市民のひんしゆくを買っていたレストランに出入りして、デカダンスの気分ひたり、両親やギムナージウムが忠誠を誓っている市民社会に反逆の姿勢を示す。かれの最初の妻となるべきヘッダ・マーズ（Hedda Maase）と知りあうのも、このベルリンの町である。パーティの席上でのメラは、けっして愉快な社交家ではなかった。ヘッダの証言によれば、口数の少いかれが笑い顔を見せたことは滅多になく、常に陰気くさく、たまにかれが笑い顔を見せると、人々は「今日はメラが笑った」といって噂の種になるくらいだったという。⁽⁵⁾ 話す^{パル}ということ^{パル}を西欧文明の本質だとすれば、寡黙なメラが西欧文明とは異質な体質をはじめからもっていたことは注目しなければならない。いずれにしてもこのベルリンで芸術にとりつかれたかれは、結婚した妻と共同でバルベイ・ドールビリー（Barbey d'Aurevilly）、トマス・ド・クインシー（Thomas de Quincey）、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe）、エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）などの作品の翻訳にいそしんでいる。かれの書斎の机上にはフェリシアン・ロップス（Félicien Rops）作の死神の舞踏がおかれ、壁にはオーブリー・ビアズリー（Aubrey Beardsley）の退廃的なポスターが飾られていたといわれる。⁽⁶⁾

「今日わが国の青年が流浪しているように、現代人として私もまた、疑惑を抱いて流浪することに慣れてきた。そしてあらゆるこういった相対主義の故に、私は確たる生活をつかむことができないでいる」、とかれ自身述懐しているように、メラは虚しい心を抱き続けて流浪するボヘミアンであった。耽美主義にひたり帝制ドイツに失望したかれは、やがて、自分の虚しい心をいやすべく、国内に妻をおき去りにし、パリに向けて脱出、ここでスラブ系の女性ルシー・カエリック（Lucie Kaerrick）と知りあって二度目の結婚生活に入る。かれの結婚生活もまた、市民的な安定性を示していないわけである。

しかしこのパリの生活が、いろいろの意味でかれの思想転向をうながす大きな転機になっていることは、注目しなければならない。

失意の魂をいやすべくパリに夢を抱いたにもかかわらず、かれの期待に反して、パリはメラールの虚しい心をいやしはしなかった。それどころか皮肉なことに、このコスモポリタンの町で亡命者のような根無し草の生活を続ければ続けるほど、逆に、寄辺なき異郷のパリで祖国に目ざめたりヒャルト・ウァーグナーや、オーストリアに育った辺境ドイツ人ヒトラーや、バルト沿岸の国エストニアで育った辺境ドイツ人アルフレート・ローゼンバーク (Alfred Rosenberg) のように、メラールもまた、自分の足でしっかり立つべき大地が恋しくなってきた。ドイツ人という運命共同体から逃れられぬという自覚が高まってゆく。孤独者は連帯をもとめる。ただし亡命者マルクスが、万国の労働者のなかに孤独の魂をいやすべき連帯をもとめたのとはちがって、流浪の人間メラールは、民族のなかに孤独の魂をいやすべき連帯をもとめたのである。この民族感情の目ざめということと同時に、さらにメラールが、当時パリに滞在していたロシアの象徴主義の作家ディミトリ・メレジコフスキー (Dimitri Merezhkovski) を通じて、西欧文明の退廃を鋭く突いたドストエフスキーに心をひかれるようになり、その翻訳全集二三巻を後に出版するほどまでに心酔し、その反西欧的な東方の神話を生み出すきっかけとなったのも、このパリでの生活である。さらにまた、メラールを芸術至上主義の静寂主義的世界から連れ出す誘因となったのも、当時日露戦争でデモやアジヤ討論の政治的活気を呈していたパリの街並であった。

こうして徐々に民族に目ざめつつあったかれは、パリからイタリア旅行を終えた後、くびすを帰してドイツに帰国し、関係当局に愛国の情を吐露した著作『ドイツ人——われらの人間史』(Die Deutschen—unsere Menschengeschichte) を出版した。

schichte, 1904—1910) を示して、キュストリンで軍務に服そうとするが、持病の強度な神経症のためやむなく軍務を退くことになる。フリードリッヒ・シュウァイス (Friedrich Schweig) にあてた一九二〇年二月十六日の書簡のなかで、メラーは自分の過去を回想して述べている——「あの頃、私は全くちがったものにとりこんでいました。〈文芸〉に代って生が登場してきたのです。私は在外ドイツ人でした。私は諸国民のちがいを体験していました。私には大きな対決が迫っているように感ぜられたのです。その結果が『ドイツ人』で、これは全く心積りの書物として考えられたものなのです。教育書としてです。国民を自己主張にまで教育することになるような書物としてです。歴史から使命が推し測れるような書物としてです」と⁽⁸⁾。だが一旦は愛国の志情に燃えたものの健康上のためやむなく軍隊を退いたかれは、再び所在なくロンドン、パリ、イタリア、シチリア、バルト沿岸諸国、ロシア、フィンランド、デンマーク、スエーデン、とヨーロッパ各地を転々とし、やがて第一次世界大戦を迎えたのである。

戦争が勃発する前、在外生活のなかでかれはいろいろの文芸論を書いている。ニーチェや、ヘルマン・コンラディ (Hermann Conrad)、D・V・リーリエンクローン、S・ブシビシェフスキー、R・デーメル、シュテファン・ゲオルゲ (Stefan George) らを論じた包括的な著作『集団・個人描写における近代文学』(Die moderne Literatur in Gruppen-und Einzeldarstellungen, 1899—1902)、十九世紀末に起った芝居形式の特徴を芝居の歴史のなかに跡づけようとした『バリエテ』(Das Variété, 1902)、フランスの芝居の歴史を論じた『フランスの芝居』(Das Théâtre français, 1905)、イタリアの芸術を論じた『イタリアの美』(Die italienische Schönheit, 1913) がその重要な文芸論である。しかし第一次世界大戦は、メラーの芸術至上主義を吹きとばし、コスモポリタニズムからナシ

ヨナリズムへ、静寂の世界から生の世界へ、観照の世界から行動の世界へと、かれの転向を決定づける大きな体験であった。第一次世界大戦は嵐のようにほとんどすべてのドイツ人を感激のうずきに巻き込む。「安定した時代に育ったわれわれのすべては、異常なもの、大きな危険へのあこがれを感じていた。そこへ、戦争が、めいていのうにわれわれを襲った。花の雨のなかを、バラと血潮のほろよい気分で、われわれは出陣した。戦争はまさしくわれわれに偉大さ、強さ、厳粛なものをもたらすはずのものだった。それは、われわれにとって、男らしい行為、花咲き乱れる血のごとき色露をおびた草原での陽気な射撃戦のように思われた」とエルンスト・ユンガー(Ernst Jünger)も述べている⁽⁹⁾。プロシアの陸軍中佐をしていた叔父に捧げるためにプロシア賛美の『プロシア様式』(Der preussische Stil, 1916)をちやうど執筆中のメラーもまた、第一次世界大戦に異常なめいていをおぼえる。そこには、生を燃焼させるものがあると同時に、神経症に悩むひ弱な魂をもったボヘミアンには堪えがたい、うつろな市民生活の単調なリズムをうち破る、スリルとロマンティックなものがあつたからである。一九一六年、メラーは自ら国民軍に志願し、東部戦線に配属される。だが持病の神経症のため激務に堪えられず、ルーデンドルフ將軍の管轄下にある OHLA (Auslandsabteilung der Obersten Heeresleitung、最高統帥部外国課)に配属換えとなる。OHLA は、外務省から独立した OHL (最高統帥部)直属の宣伝局で、メラーはここで東欧諸国向けの宣伝にたずさわった。後の「六月クラブ」(Juniklub)の主要メンバーとなるハインリッヒ・フォン・グライヒェン||ルスブルム(Heinrich von Gleichen-Rudwurm)やマックス・ヒルデバート・ベーム(Max Hildebert Boehm)やハンス・グリム(Hans Grimm)も、戦争中メラーと同様に広報活動にたずさわっていた仲間である。こうしてかれらは、OHLA でそのまま一九一八年十一月の革命を迎える。戦争は終った。だが、たとえE・ユンガーのよう

に前線に立たなかったにしても、ひとたび硝煙の匂をかいたメラーは、もはやもとのメラーではなかった。「私の昔の文芸論を過去と忘却のなかに葬って下せよ」「F・シュウマイスに於いた同書簡のなかでメラーは述べる。⁽²¹⁾今や文芸の世界ではなくて生の世界、芸術の世界ではなくて政治の世界、⁽²²⁾がかれをとらえる。以後メラーは、一九二五年五月三〇日、神経症が高じて自殺するまじ、もとの芸術の象牙の塔に立ちもどることはなかったのである。

- (1) Klaus Schröter, *Literatur und Zeitgeschichte*, Mainz, 1970, S. 114.
- (2) ebd., S. 117.
- (3) Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, S. Fischer Verlag, 1968, S. 154, S. 167, S. 172.
- (4) Moeller van den Bruck, *Das Dritte Reich*, 3. Aufl., Hanseatische Verlagsanstalt, 1930, S. 102, S. 108.
- (5) Pechter, S. 19.
- (6) Hans-Joachim Schwierskott, *Arthur Moeller van den Bruck und der revolutionäre Nationalismus in der Weimarer Republik*, Musterschmidt-Verlag, 1962, S. 16.
- (7) Fritz Stern, *The Politics of Cultural Despair—A Study in the Rise of the German Ideology*, Univ. of California Press, 1961, p. 203.
- (8) Schwierskott, S. 31 f.
- (9) Ernst Jünger, *In Stahlgewittern in Werke*, Bd. I, Tagebücher I, Stuttgart, S. 13.
- (10) Schwierskott, S. 21.

二

一九十八年十一月、革命の勃発によって OHLA は活動を停止し、メラーは一言もいわずに OHLA の官命を去

り、こうしてウアイマール共和国時代におけるかれの「六月クラブ」の政治活動がはじまる。このクラブは、政治サークルにますます接近してゆくメラーが、戦争前からかれが関係していた「月曜卓」(Montagsisch)から招きよせた政治活動に関心を示すメンバーや、H・V・グライヒェンシルスブルムの率いる「国民・社会連帯協会」(Vereinigung für nationale und soziale Solidarität)のメンバーや、エドアルト・シュタトラー(Eduard Stadler)を中心とする「反ポリシェビズム連盟」(Antibolschewistische Liga)のメンバー、それに VKO (Verein Kriegerhilfe Ost 東部軍人支援同盟)のメンバーとが合流して結成されたクラブである。⁽¹⁾

「月曜卓」は、十九世紀末にベルリンで生まれた文学サークルのひとつで、メラーのほかにP・フェヒター、F・エーベルス、H・グリム、テオドル・ドイブラー(Theodor Daubler)、ユンラート・アンゾルゲ(Conrad Ansoerge)、ルードルフ・ペッヒェル(Rudolf Pechel)らが会員で、時にはマックス・シェーラーなどもこの会に顔を見せていた。このサークルは月曜ばかりでなく毎日のようにバーで会合がもたれていた。

「国民・社会連帯協会」は、テューリンゲン地方の貴族出身で、「ドイツ学者・芸術家同盟」(Bund deutscher Gelehrter und Künstler)の書記をつとめ、組織づくりの名人だったH・V・グライヒェンシルスブルムが一九〇八年十月に結成したおよそ、二〇人ほどからなるクラブで、会員のなかにはE・シュタトラー、アードルフ・グラボウスキー(Adolf Grabowsky)、ヨーアヒム・ティブルティウス(Joachim Tiburtius)、ツェーザル・フォン・シリング(Cäsar von Schilling)らがあり、新しい国家、新しい経済、新しい民族共同体のスローガンを掲げ、反自由主義を唱えていた団体であるが、このクラブは社会問題に対する関心が強かった。

「反ポリシェビズム連盟」は、マルティーン・シュパーン(Martin Spann)教授の感化を受けて愛国主義者にな

ったE・シュタトラーが一九十八年十二月に結成した団体である。もともとかれは中央党に属していたが、マティアス・エールツバーガー (Mathias Erberger) と対立したため、中央党を去った。戦争中はロシア軍の捕虜となり、ロシアで身近かにポリシェビズムを体験し、帰国後ドイツの赤化を防止する目的で、かれはこの団体を結成する。この団体は資本家の大きな関心をよび、ベルリンやライン・ウエストファリア地方の金融・産業界が多額の資金を出資したために、一九十九年から二〇年頃にかけて巨大な組織に発展してゆき、一九二〇年にはこの団体は、十五の地区本部と一六二の地方団体を擁し、ヘッセン・ナッサウだけでもメンバーの数は二万人にのぼったといわれる。しかしその後、左傾化の色を強くする「国民・社会連帯協会」の影響を受けたこの団体は、財界人との折りあいが悪くなり、E・シュタトラーも座長の座を下り、団体は解体し、「六月クラブ」に合流してゆくことになる。

「東部軍人支援同盟」は、VDSt (Verein deutscher Studenten ドイツ学生同盟) のメンバーやウィリゲン (Willissen) 少佐が中心となって結成された団体で、かれは、戦時中「東部辺境防衛中央局」(Zentrale des Grenzschutz Ost) の局長をやっていたが、ドイツ革命後フライコール団を中心にした辺境防衛軍を組織し、一九十八年十一月にこの団体を結成する。

「六月クラブ」は、これら諸団体の寄せ集めから成り立っていた。最初の集会が一九十九年三月にベルリンのポツダム・プリバート街二一i番地にあるH・V・グライヒェンllスブルムの自宅で開かれたため、当初は「イー・クラブ」(I-Klub) とよばれていたが、一九十九年六月以後は、同年六月に締結されたベルサイユ条約に反対の意を表明するため、ベルリンの左翼インテリが十一月のドイツ革命に因んで結成している「十一月クラ

ブ」の向うを張って、「六月クラブ」と名を改め、場所もベルリンのモッツ街二二番地に移転する。クラブに係っていたのは、中心人物であるメラーやH・V・グライヒェン||ルスブルムやE・シュタトラーや後のイエーナの教授M・H・ベームの他に、P・フェヒター、H・グリム、『ドイツ評論』(Deutsche Rundschau)の編集者R・ベヒヘル、さらにM・シュパーン教授、ハインリッヒ・ヘアファールト(Heinrich Herrhardt)教授、フランツ・オッペンハイマー(Franz Oppenheimer)教授、エルンスト・トレールチ(Ernst Troeltsch)教授、後にナチスに殺害された弁護士エドガー・ユリウス・ユンク(Edgar Julius Jung)、著名な地政学者カール・ハウスホーファー(Karl Haushofer)の息子で同様にナチスに殺害されるアルブレヒト・ハウスホーファー(Albrecht Haushofer)、ナチスを後に脱党して亡命するオットー・シュトラッサー(Otto Strasser)、保守派のクノー・ウェスタルプ(Kuno Westarp)、デモクラットのゲオルク・ベルンハルト(Georg Bernhard)やウエルナー・パールホルツ(Werner Maeholz)、社会主義者のアウグスト・ミュラー(August Müller)、中央党のハインリッヒ・ブリュニング(Heinrich Brüning)、ウァンダーフォーゲル運動の研究者ハンス・ブリュナー(Hans Blüher)、さらにトーマス・ヤンも、一時期このクラブに関係をもっていた。クラブのモットーは、P・フェヒターによれば、「すべての戦争は、戦後になつてはじめてその勝敗が決められる」という思想にあり、敗戦という現実から教訓を引出して明日の行動の糧にしようとするところにあった。会は毎火曜日の夕べにもたれ、メラーやH・V・グライヒェン||ルスブルムが座長をつとめ、かれらの側には毎年選挙で決められる「十三人委員会」がひかえていた。クラブが活発だったのは一九一九年——二〇年頃までで、この時期にはクラブの入会もそれほど閉鎖的ではなく、右の多彩な顔ぶれを見ても、イデオロギーによって人を区別せず、愛国的心情をもったすべての人に門戸が解放され

ていたものと想像される。事実この時期にクラブを支えていたものは、メラーのいわゆる「信頼——世界大戦やわれわれの未来への世界革命を越えた信頼——サークルや勢力においてどこにおもむこうと、いたるところ若い人々の間の信頼」であった。⁽⁴⁾ あいかわらず無口なメラーは、けっして会で演説をぶつようなことはなかったが、クラブを支える親柱の役目を果たしていた。

クラブの主要な活動は出版活動にあった。クラブのメンバーが関係していた重なる単行本や雑誌や新聞には、一九二二年にメラー、H・V・グライヒェン＝ルスブルム、M・H・ベームほか三八人のメンバーが寄稿して出版した『新戦線』（Die Neue Front）、R・ベッヒェル発行の『ドイツ評論』（Deutsche Rundschau）、ウィルヘルム・シュターペル（Wilhelm Stapel）発行の『ドイツ民族性』（Deutsches Volkstum）、ノーテ・シュティネス（Hugo Stinnes）の『ドイツ一般新聞』（Deutsche Allgemeine Zeitung）、ワルター・シュミッテ（Walther Schotte）編集の『プロシヤ年報』（Preussische Jahrbücher）、M・H・ベーム発行の『辺境飛脚』（Grenzboten）などがあるが、なかでも大切なのは「六月クラブ」の機関紙である『良心』（Gewissen）の発行である。この新聞はもともと前線士官のウェルナー・ウィルト（Werner Wirts）が発行していたものであるが、E・シュタトラーによって後に引きつがれ、一九一九年四月九日に『良心——国民教育のための自由寄稿紙』（Gewissen, Unabhängige Zeitung für Volksbildung）の名の下に創刊された。しかしE・シュタトラーは講演旅行にいそがしく、『良心』の編集や発行の責任はメラーにまかされた。一九二二年一月における『良心』の読者数は三万人、一年後には週に一万部発行されたといわれるが、この頃の読者数の実数はせいぜい四千人程度だったらしい。⁽⁵⁾ 『良心』は、政党や階級を越えて国を愛するあらゆるドイツ人に語りかける良心たろうとし、トーマス・マンも、一九二〇年H・V・グラ

イヒエン・ルズブルムにあてた手紙のなかで、「私が常に見たいと思い、ともに政治を論ずるあらゆる人に向って申分なく最高のドイツ新聞であると語りたくなる新聞」と絶賛⁽¹⁾している。けれどもその後二年して、『ドイツ共和国について』(Von deutscher Republik)の演説のなかでウァイマル共和国支持の立場を公に表明したマンは、ベルサイユ条約の責任者としてM・エールツバーガーやW・ラーテナウを槍玉にあげてウァイマル共和国を烈しく非難していた『良心』からたもとを分つてゆく。『良心』が廃刊になるのは一九二七年で、その後は『輪』(Der Ring)と名を改め、『六月クラブ』解体後にH・V・グライヒエン・ルズブルムらの結成した「紳士クラブ」(Herrenklub)の機関紙となつてゆく。

「六月クラブ」が手を染めたのは出版活動だけではなかった。戦後ドイツで政治教育の必要が叫ばれる風潮に乗って、「六月クラブ」も、「政治学院」(das Politische Kolleg)とよばれる制度をつくり、政治の教育や研究にも手を出している。こうして一九二〇年十一月一日、M・シュバーン教授指導の下に、「国民政治の教化・教養作業のための政治学院」(das Politische Kolleg für nationalpolitische Schulungs- und Bildungsarbeit)が設立される。その指導者は、M・シュバーンの他にH・V・グライヒエン・ルズブルム、ルードルフ・フォン・ブレッカー(Rudolf von Broecker)であった。当初、「政治学院」は、「六月クラブ」のあるベルリンのモッツ街二三番地にその居を構えていたが、一九二一年になってシュパンダウに移転する。この学院は、外交部門、国民性や民族の部門、ドイツや外国における労働組合と政党運動に関する部門、職業身分代表制に関する部門、文化政治の部門、世界経済危機に関する部門、国家理念や憲法の部門に分れ、メラーはその外交部門の責任者になっている。「政治学院」は研究だけでなく教化にもあたることになり、集められた人々は教育期間中シュパンダウの宿所で講習

を受けた。期間は八日から十四日間、参加者の数は平均三〇人から五〇人ほどであったといわれる。⁽⁸⁾しかしこの学院も、一九二四年M・シェーバーンが国会議員に当選すると同時に、その支柱を失って解散することになる。

「六月クラブ」はけっしてスムーズに運営されていたわけではない。しかしH・V・グライヒェン||ルスブルムと、R・ペッヒエルやウィルヘルム・フォン・クリース（Wilhelm von Kries）との対立、E・シュタトラーとフリードリッヒ・ナウマン（Friedrich Naumann）との対立など、クラブ内でのさまざまなあつれきにもかかわらず、クラブがなんとか運営できたのは、メラーの力によるところが大であったといわれる。メラーは、クラブの若い青年たちの間で教祖的存在であった。R・ペッヒエルの報告によれば、メラーに心酔した青年の一人がベッヒエルのところへやってきて、自分はメラーの命ずるところとあれば、ウァイマール共和国政府の要人たちがバカ騒ぎしているバンゼー湖のボートを爆破するのものとわなない、と語ったという。⁽⁹⁾だが一九二五年におけるメラーの自殺死とともに、クラブはその支柱を失い、H・V・グライヒェン||ルスブルムらによる新たに発足した「紳士クラブ」、M・H・ベームらによる新たな「辺境・外国研究協会」（Institut für Grenz-und Auslandsstudien）など、さまざまな団体に解体していった。だが「六月クラブ」の解体を早めたのはメラーの死ばかりではない。一九二四年におけるインフレの終焉、対独賠償ドーズ案の発表、一九二五年におけるロカルノ条約の締結などによって、ウァイマール共和国が安定化に向う時期にさしかかっていたことも、クラブの解体を早める大きな原因であった。メラーの自殺も、神経症ということと同時に、このような時代の趨勢と関係があったのかもしれない。メラーと「六月クラブ」は、あくまで混乱した二〇年代初頭の産物であったのである。

「六月クラブ」は、政治政党ではない。インテリのサロンのクлубである。精神は政治ではない。普遍的な

世界觀を掲げようとするインテリは、一般に、精神の自律性^{ガイスト}をもとめ、特定の利害集団によつてその思想が相対化されるのを嫌う、マンハイムのいわゆる「自由浮動層」(freischwebende Schicht)である。かれらの集団化は、平均化され組織化された規律やプログラムやプロパガンダをもつ組織集団ではなくて、比較的小さな密教的な結社に適している。ガーシュテンハウアー(Gerstenhauer)によれば、二〇年代ドイツにあらわれた新保守主義の闘士たちは、たいてい、西欧風のキャフェ的文人の思考形式と闘争形式をもつて活動したという。⁽¹⁰⁾このことは、メラに最もよくあてはまるところである。風来坊インテリたるかれは、特定の政治政党に身をおいたわけではない。大衆を動員すべく街頭で大衆に向つて怒号したわけでもない。メラの政治活動は、その政治への強烈な関心にもかかわらず、あくまでサロンのインテリの出版活動に終始した。シュビールスコット(Schwierskott)の指摘するごとく、それはあくまで「印刷用黒インキの反逆」⁽¹¹⁾でしかなかったのである。

- (1) Schwierskott, S. 56.
- (2) Klemens von Klemperer, *Germany's New Conservatism—Its History and Dilemma in the Twentieth Century*, Princeton, 1957, p. 106.
- (3) Fechter, S. 30.
- (4) ebd., S. 64.
- (5) Stern, p. 234.
- (6) Schwierskott, S. 57.
- (7) Stern, p. 234.
- (8) Schwierskott, S. 64.
- (9) ebd., S. 59.
- (10) Kurt Sonthmeier, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik*, 4. Aufl., Nymphenburger Verlagshandlung, München, 1960, p. 106.
- (11) Schwierskott, S. 56.

dlung, 1962, S. 309.
(11) Schwierskott, S. 86.

四

第一次世界大戦は、メラーの政治姿勢を固める上での原点である。かれがドイツ——西欧、旧世界の秩序原理——新世界の秩序原理、十九世紀——二十世紀の原理を明確にうち出すのは、この戦争体験を通じてである。

メラーにとって、この戦争は「教育戦争」(Erziehungskrieg)でなければならなかった。「すべての戦争は、戦後になってはじめてその勝敗が決められる」。世界大戦は一体なんであったのかこの間に正しく答えてはじめて、この戦争がわれわれにとって有意義なものであったといえることができる、とかれは考える。こうしてメラーは、世界大戦の体験を北方人的な「運命」(Schicksal)観で受けとめようとする。北方人特有のこの「運命」観とは、かれによれば、現実の矛盾を認識する態度、矛盾した現実を甘受するのではなく、そこからなんらかの積極的な意味を引き出そうとする態度、矛盾した現実を偶然として見るのではなくて、全体の有機的な連関のなかでとらえようとする態度、を指している⁽¹⁾。かくて第一次世界大戦は、かれによって、形而上学的な意味づけをほどこされることとなる。

多くのドイツ人と同じく、メラーにとっても、ドイツの敗戦は「背後の短剣」(Dolchstoß)によるものである。われわれは、連合国側の謀略的な宣伝に耳を傾けてしまった故に武器を捨てたのであって、戦闘によって敗れたのではない。「われわれは負けた」(Besiegen)のではない。われわれは克服された(überwinden)のである——わ

れわれ自身の手によって」。⁽²⁾

「背後の短剣」の神話を振りまわすだけではない。この戦争はドイツ人にとって正当な戦争であった、とメラールはこれを合理化する。「一九十四年の体験は、正義の体験であった」。⁽³⁾ これまで非政治的なドイツ人は、外界のことが分らず、ひたすら実直に働いてきたが、ドイツの発展をねたみ、これを阻止しようとする老かいな連合国側の妨害に会ってしまった。この戦争は、これから伸びようとする民族が、生きてゆくための当然の自衛戦争であった。こうしてメラールは、「老いた民族」(alte Völker)——「若い民族」(junge Völker)という生物学的な民族の形而上学をもち出してくる。この二つの対立こそ、世界大戦を解く鍵であり、同時に世界の平和を解く鍵でもある。⁽⁴⁾ 「若い民族」を暴力によって狭い空間のなかに閉じ込めず、これにしかるべき生活の道を与えることこそ、世界平和に至る道である。ドイツのような「若い民族」にとっては、世界大戦は正しい「生存権」(Recht auf Dasein)の主張であった。メラールのこの「生存権」の思想はナチスの「生活圏」(Lebensraum)の思想を先取りするものであるが、かれの『若い民族の権利』(Das Recht der jungen Völker, 1919)の論文では、ナチスのような対外侵略の姿勢は見られず、「若い民族」と「老いた民族」とがたがいに排除しあう(ausschließen)ことなく包摂しあう(einschließen)ことが力説されている。⁽⁵⁾

英仏のような西欧の「老いた民族」は、遺産、所有、充足、享楽を特徴とし、人口低下に悩み、またその社会の原理はリベラリズムという社会解体の原理に根ざしている。これに反してドイツや東欧諸国のような「若い民族」は、若々しいバイタリティと決断にあふれ、狭い空間において人口過剰に悩み、その社会の原理は『ソートアリズム』(Sozialismus)という、欠乏から生れた組織原理に根ざしている。⁽⁶⁾ 両者の対決は、人口過少と人口過

多、リベラリズムと「ソーシアリズム」の対決ばかりではない。それは、「理念」(Idee)と「理想」(Ideal)との対決でもある。老化した西欧のいわゆる自由・平等・博愛の「理念」とは、政治的に着色されたプロパガンダにすぎぬ。これに反して若いわれわれドイツ民族のいういわゆる「理想」とは、プロパガンダというにはあまりに高貴なものである。われわれは、西欧のような安手なプロパガンダの下で戦ったのではなく、「理想」に向って解決すべき「問題」(Probleme)をもって、戦場に臨んだのである。⁽⁷⁾「問題」が「理念」やドクトリンになるにつれて、啓蒙思想はその初期の精神から遠ざかり、自由・平等・博愛は名ばかりのものに墮し、うつろな空文句と化してしまった。今日、平和の美名の下にわれわれから多くの土地を奪おうとする連合国は、一七八九年の精神を忘れてしまったのか。「理念」を愛する者は、過去の歴史を愛する。⁽⁸⁾問題を否定する者は、生起を否定する——生成しゆく歴史を否定するものである。⁽⁸⁾「問題は、現在のために未来に向う突進である」。⁽⁹⁾「老いた民族」は、「問題」を否定することによって、生成の世界から見放されている。これに反して「若い民族」は、「問題」を抱え込むことによって、未来をもつ。今日もはや老いた西欧はその活力を失い、歴史形成の重心は若い東に移動しつつある。歴史の形成は「若い民族」を必要とする。かれらから一切を奪うことはできても、未来だけは奪うことはできない。未来はかれらのものだ。ドイツは領土の野心をもっているわけではない。ただ正當な平等をもとめているだけだ。過剰人口にはち切れる「若い民族」は、狭い空間のなかで生きてゆくことができぬ。われわれドイツは、イギリスの不正と戦ったアメリカのワシントンだ。「老いた民族の正義とは、資本主義の既得権(Vorrecht)のことだ。若い民族の正義とは、社会的な要求権(Anrecht)のことだ」。⁽¹⁰⁾今や国際政治において、失われた正義と均衡を回復しなければならない。この目的のために「若い民族」は、ドイツを中心にして団結し、

老いた西欧に反省をうながさなければならない。これこそ「若い民族」の歴史的使命である。かれらは、ヨーロッパをこのような新旧の全体的連関においてつかむ「有機的な政治」(organische Politik)の眼をもたなければならない。こうして、若かった頃にメラ自身が体験した旧世代に対する若い世代の反逆意識が、世界大戦を契機にして、国際政治の舞台にまで投影され、十九世紀西欧に対する二〇世紀ドイツの生きるべき座標がはっきりと定位されるのである。

第一次世界大戦を正当なものとして肯定し、「背後の短剣」の神話をもてあそぶメラが、一九一八年十一月のドイツ革命や、西欧のリベリズムに則したワイマル憲法を發布し、ベルサイユ条約の締結によってドイツを「下男」の状態に落し入れたワイマル共和国に対して、きびしい批判の目を向けたのは当然である。

一九一八年十一月の革命は、⁽¹⁾ けつしてドイツ革命ではなかった。それは、「西欧的はったり」、「低能の罪過」である。真に革命的な人間によってではなくオポチュニストによっておこなわれたことが、この革命の悲劇である。また、外交のことを念頭におかず、敵の宣伝に耳を貸してドイツに武器を捨てさせたこの革命は、「政治の放棄」⁽¹²⁾を意味するものでしかない。

けれどもメラは、この革命を既成事実として肯定することには、けつしてやぶさかではなかった。成ったことは成ったことであり、そこから人は出発する以外にはない。この革命はけつして無駄ではなかった。たしかにそれは愚行ではあったが、この革命が残した「ソーシアリズム」の問題は残る。この問題のなかにこそ、新しい世界秩序の原理が要約されている。敗戦をこのような形でとりもどしてこそ、第一次世界大戦は、真に有意義な「教育戦争」であったといえる。⁽¹³⁾一九一八年十一月は、世界史の意志に従って「招命された」(berufen)

ものである。この革命が残した「ソーシアリズム」の問題を、われわれは、ドイツと結ぶ「若い民族」のために、ドイツから、解決しなければならぬ。⁽¹⁴⁾「革命とともに、革命による失望とともに、われわれの歴史はようやくはじまる」⁽¹⁵⁾。

その本質において「非時代的な」(unzeitgemäß)人間であったメラーにとって、帝制ドイツが虚しかったのと同じく、ウァイマル共和国もまた虚しかった。バートルト・ブレヒト (Bertolt Brecht) やゲオルゲ・グロース (George Grosz) がウァイマル共和国をカリカチュアライズしたのと同じく、メラーもまた、その方向はちがうが、これを嘲笑し攻撃する。日常的で散文的なウァイマル共和国の政治は、非日常的で想像力豊かな芸術家たちの魂を満足させるものをもたない。メラーにとってもまた、ウァイマル共和国は「靈感性なき共和国」(eine begeisterungslose Republik) ⁽¹⁶⁾であった。ドイツにおけるあらゆる政治の貧困は、妥協、中庸、不決断、御都合主義、相対主義にもとづく政党政治より起る。政党政治は、無であることによって一切である。⁽¹⁷⁾歴史に登場した偉大な人間は、マキャベリにしろ、ゲーテにしろ、ビスマルクにしろ、すべてリベラルな人間ではなかったし、決定的な歴史的事件は、ナポレオンの権力確立にしろ、ドイツ帝国の建設にしろ、すべてリベラルな事件ではなかった。⁽¹⁸⁾これに反して政党人は、「いかなる独創性も生まず、妥協者であった。忍耐の人 (Gedulmenschen) ではあったが、行為の人 (Tatmenschen) ではなかった。ぶつけられる人 (Gestoßene) ではあったが、ぶつかる人 (Stoßende) ではなかった。忍耐 (Langmut) はもっていたが、大胆さ (Wagemut) はもちあわせていなかった。放任 (Gehelassen) ではあったが、着手 (Inangriffnahme) ではなかった」⁽¹⁹⁾。リベラリズムとは、「いぜんとしてとり残されて、ムシヤクシヤし、うんざりしている民衆から、出世した第三身分の社交界が、一七八九年の約束をだましとることをお

ばえ、また常にこれを利用することをおぼえた、政治的トリック⁽²⁰⁾のことである。そのいう自由とは、国民大衆のためのものではなく支配階級のためのものであり、たくらみの自由である。リベラリズムは、主知主義に流れ、概念を濫用し、概念を手段として利用する。リベラリズムは、利己主義やインターナショナルリズムに走り、民族を度外視するものであり、ゲマインシャフトではなくゲゼルシャフトの表現である⁽²¹⁾。リベラリズムは、「政治的民族の道德的発病⁽²²⁾」や「人類の自己解体⁽²³⁾」を招く。このリベラリズムの故に解体した古代ギリシアは、そのよい例である。

しかし、「いかなるヘモクラシーも存在しなくなるとき、われわれはドイツにおいてデモクラシーに帰結することになる⁽²⁴⁾」というかれの言葉が示しているように、メラ自身、デモクラシーを否定しているわけではない。ただしかれのいう「デモクラシー」とは、西欧型デモクラシーのことではなく、ドイツ的な「自己の運命に対する民族の参与⁽²⁵⁾」のことである。かれによれば、本来ドイツ人はデモクラティックな民族であり、民族共同体を形成していた。それは、部分や分節や細胞に還元される有機的な結束を特徴としていた。しかるにウァイマル共和国は、機械的であって有機的ではなく、作爲的な寄せ細工の国家だ。それは、打算や駆引に終始する口先きだけのディスカッションに頼っている。だが、「民族の歴史は、ディスカッションによって実現されるのではない⁽²⁶⁾」。寡黙で滅多に笑いを見せぬメラ、芸術的魂をもったメラ、自分のぜい弱な耽美主義を克服しようとして、あえて男性的な行動力と決断力の催眠術を自分にかけようとする帰還兵士メラ、若い世代の反逆意識をもって十九世紀の世界に離縁状をたたきつけるメラは、こうして、ディスカッションに根ざし、靈感性にとぼしく、優柔不断な、十九世紀西欧のリベラリズムに則したウァイマル共和国を、決定的に拒否するのである。

ウアイマール共和国の政治体制と対決するメラーの原理は、「ソーシアリズム」である。だが、それはマルキシズムではない。かれの「ソーシアリズム」はマルキシズムから一線を画そうとするものである。

①マルクスは、ヨーロッパのよそ者、ユダヤ人であった。キリストが愛を説いたのに反して、かれは、憎悪と復讐を説き、ヨーロッパを破壊にみちびいた。かれは予言者ですらない。予言者とは民族や歴史と一体化した人間であるとすれば、マルクスは、「既成への参与なくして生成を規定しようとした根無し草⁽²⁷⁾」である。コスモポリタンの性格をもったマルクスの思想は、国家や民族の問題を見落している。だが、「国家性の放棄は、国民のなかに完成される歴史の放棄である」⁽²⁸⁾。

②人間の歴史は、「精神の力」(geistige Kräfte)がつくり出す歴史である。唯物主義の説くところとは全く逆に、意識こそは、生活を変えるものである。プロレタリアートは、マルキシズムが説くような外的・物質的なものにではなく、内的・精神的なものに目ざめなければならぬ。支配する権力は、物の分配にではなく精神的参加にあり、所有ではなく「権限」(Berechtigung)、横領ではなく「対等性」(Ebenbürtigkeit)にある。プロレタリアートの問題は、「精神的向上」(innerer Aufstieg)の問題であって、けっして外的問題ではない。⁽²⁹⁾人間をプロレタリアートにするものは、機械でも賃金でもなく、プロレタリアートという意識である。「プロレタリアートたらんとする者が、プロレタリアートなのだ」⁽³⁰⁾。かれらは、プロレタリアートという意識をとり去って、国民というより精神的な世界に目ざめなければならぬ。今日、もたざるものがプロレタリアートだとすれば、われわれドイツ人のすべてがプロレタリアートではないか。⁽³¹⁾

③マルキシズムの説くところとは全く逆に、歴史を規定するものは、経済ではなく、政治である。政治は経済

に先立つ。経済は政治から結果するものである。⁽³²⁾

④マルキシズムは、階級という部分だけを見て、諸民族というトータルな存在を看過している。そして「すべての民族はその固有のソーシアリズムをもつ」⁽³³⁾というところを見落している。ドイツの社会主義者は、過剰人口に悩む「若い民族」の問題を外交によって解決しようとする努力を全く払っていない。⁽³⁴⁾

⑤マルキシズムはオプティミズムである。しかしその説くところとちがって、人類は、自分が解決しうる課題を設定してきたのではなくて、常に解決できない課題のみを設定してきた。そこにこそ、人間歴史の天才性と魔性⁽³⁵⁾とが存在するのであり、これこそ至福一千年思想の本質といふべきである。

こうしてメラーは、「ソーシアリズム」をマルキシズムから峻別する。世界革命を通じて世界を救済する主体は、プロレタリアートではなくて民族である。「ソーシアリズム」が意義をもちうるのは、それがプロレタリアートだけでなく国民全体をつかむときにおいてのみである。マルキシズムの終るところに、「有機的な」真の「ドイツ的ソーシアリズム」(Deutscher Sozialismus)が生れる。

メラーの説くこの「ドイツ的ソーシアリズム」とは、プロシア的な「ソーシアリズム」のことにはかならず、かれのプロシア主義に対する共鳴に根ざしたものである。「若い民族」の模範たるプロシア国家の歴史は、「ヨーロッパの諸民族の歴史のなかで、最も美しく、最も高貴で、最も男性的な国家の歴史」⁽³⁶⁾である。その「ソーシアリズム」は、特定階級の独占を許さず、「計画的に秩序づけられた経済の全状況にてらして、国民全体の利益においておこなわれる、すべてのたぐいの労働に対する報酬の無党派的な国家规定」⁽³⁷⁾を本質とするものである。今や、プロシアの「ソーシアリズム」は、単なるプロシアだけのものでなく、戦争の期間を通じてますます全ドイ

ッに浸透し、生きようとする全ドイツ国民の生活原理となった。こうしてプロシア的な「ソーシアリズム」を説くメラーは、左翼に向ってマルキシズムを捨てよとよびかける。

だがリベラリズムとマルキシズムを批判するメラーは、旧保守主義をも、これを「反動」(reaktionär)として葬り去る。二〇世紀における産業構造の変化、革命と敗戦による社会混乱、賠償やインフレによる中産階層のプロレタリア化、特権階級の権威喪失にもとづく平均化された大衆社会の出現の下に、社会の再統合をもとめて登場してくるこの新保守主義は、もはやウィルヘルム帝制時代の旧保守主義ではあり得なかった。新保守主義は、旧保守主義と次のような点でちがっている。――

① 宗教性や安定した秩序感に支えられていた後者とちがって、フリッツ・スターン(Fritz Stern)の指摘するごとく、文化的絶望から革命的になり、ノスタルジアから保守的になった。⁽³⁸⁾

② ウアンダーフォーゲルのような青年運動と一九十四年の理念に帰依し、内に不吉な行動主義のダイナミズムを秘めた、戦争体験を経た若い世代のナシヨナリズム。

③ 十九世紀の世界に対する鋭い断絶意識をもって、帝制時代の唯物主義や俗物主義を否定する。

④ ビスマルク的な現実政治の感覚とはちがって、観念的な精神主義の運動であり、したがって旧保守主義者のようにドイツ国家の栄光挽回に満足するだけでなく、近代文明における人間の在り方そのものを問おうとする文明批評的視点をもつ。

⑤ 単に一部の特権階級だけでなく、青年や農民や労働者にも働きかけようとする。

⑥ 政党政治そのものを否定する。

十九世紀ブルジョア世界からの烈しい断絶の意識は、ドイツのような後進国に特有な近代化と敗戦後の社会を背景にして、ほかならぬドイツにおいて最も典型的な形で姿をあらわした。メラーにとっても、新しい「ドイツ的ソーシアリズム」の荷手は、硬直化して反動と化した機械的なウィルヘルム帝制時代を「呪われた」⁽³⁹⁾ (verfluchten)ものと感じ、「ウィルヘルム時代に義務を感じない新しい世代」である。⁽⁴⁰⁾「この世代に今日すでに属している者こそ、革命的 (revolutionär) である。その予感において、その精神的紐帯において、その運命帰属性において、……その政治的意志決定とその超政治的な根本見解において」⁽⁴¹⁾。ウィルヘルム帝制は、国家のために存在し、ホーエンツォラーン家のために存在したが、国民性の意識に生きる民族のために存在したのではない。ビスマルクが即席でつくった帝制は、政治的概念としての「祖国」 (Vaterland) ではあったが、神秘的で宇宙的な概念としての「母国」 (Mutterland) との連関を失っていた。それは、国内に北と南、プロテスタントとカソリック、中央と地方の対立を含んだ寄せ細工にすぎない。しかしわれわれは、あらゆる生命力と創造力の源泉である「母国」の胎内に立ちもどらなければならぬ。⁽⁴²⁾メラーにとっては、外的な国家形式が問題なのではなく、内的生命力としての「民族」⁽⁴³⁾ や「国民」⁽⁴⁴⁾ が問題であった。「今日われわれは、国家のために保守なのではなく、国民のために保守なのである」⁽⁴⁵⁾。こうして、かつての根無し草の生活を清算したメラーは、コスミカルなものと一体になろうとして、フロイトのいわゆる「大洋感情」に帰依しようとする。

メラーの「大洋感情」は、生の根源形式に回帰しようとするそのノスタルジアのなかにもあらわれている。十九世紀ブルジョア文明は、時間はひとつの目標に向う進歩であるとして、直線的に飛んでゆく不可逆的な一本の矢を想定した。だがメラーによれば、人間の歴史は、進歩ではなく、道も目標も定かでない「突破」 (Aufbruch)

である。⁽⁴⁴⁾ 人類がこの「突破」に向って決断した、そこに歴史というものがはじめて形成されるのである。しかも永遠の相において眺めるとき、あらゆる変化の前提は、不変である。新保守主義は革命的であると同時に保守的である。人間歴史世界の多様なパノラマも、永遠にくりかえされる循環運動にすぎず、あらゆるものはその「起源」(Ursprung)において予定され、そこにおいて発生する。⁽⁴⁵⁾ こうしてメラーの保守主義は、「超時間的に」(überzeitlich) ものを考えようとするものであり、「人間の問題、心の問題、性の問題、経済問題、国家の問題……愛、憎悪、飢え、欠乏、冒険、企画、発見、意志、野心、権力欲のごとき、常に不変の問題が存在する」という認識の前提に立ち、円環運動の時間観念をもって、十九世紀の世界が抱いた直線運動の時間観念と対決しようとする姿勢を示す。保守主義は「保持」(Erhaltung)をもとめる。「持続」(Dauer)と結束(Bindung)は、保守主義というドームの二つの柱である。⁽⁴⁶⁾ 「保守的革命」(konservative Revolution)を標榜し、保守的なものと一九一八年十一月の革命的心情とを結びつけようとするメラーにとって、ウィルヘルム時代への王制復古は、「無意味の最たるもの」である。⁽⁴⁷⁾ 今や右においても左においても、一切のウィルヘルム的なものに背を向ける風潮が起っている。もはや問題解決の主人公は国民そのものであって、かれらのために上から問題が解決されるのではない。新しい保守主義は、次のような点で、反動と化した旧保守主義から区別されなければならぬ、とメラーは考えている。――

① 反動が、革命家と同じく、革命のなかに政治過程だけしか見ないのに反して、保守は、革命のなかに歴史過程を見、全人間存在のあり方に関わる「精神過程」(geistiger Vorgang)を見⁽⁴⁸⁾。

② 反動が革命を否定するのに反して、保守は、なるほど革命を政治的には否定するが、歴史におけるその影響

はこれを肯定し、革命という「非日常的なるもの」(das Ungewöhnliche)を評価する。反動が世界を既成の姿においてとらえるのに反して、それは世界を生成の姿においてとらえる。反動政治が政治とはよび得ない代物であるのに反して、保守は、偉大なる政治である。反動は歴史を逆行させ、保守は歴史を形成する⁽⁵¹⁾。

③あらゆる思想に対して国民を優先させる保守は、「政党から自由である」(parteilos)⁽⁵²⁾。それは一切の既成政党に期待をよせず、「ドイツとドイツ民族のために保持せんとする全ドイツ人の政党」たる「第三の政党」(die Dritte Partei)をめ⁽⁵³⁾ず。

④リベラリズムが「相対的」(relativ)、革命主義が「混沌的」(chaotisch)、反動が「絶対的」(absolut)であるとするれば、保守の立場は「有機的」(organisch)であり、「創造的人間をして地上での創造の働きを存続せしめ、政治思考としては諸民族の共存をめざす、造物主的思考」である⁽⁵⁴⁾。

⑤反動の外交路線が、西欧の奴隷となつてポリシェビキと戦おうとするのに反して、保守の外交路線は、「ソーシャリズム」の諸民族とともにリベラリズムと戦⁽⁵⁵⁾う。

このように反動から自分を区別するメラーにとって、時代はもはや君主制のものではない。われわれが必要としているのは、「君主の役職を民族から引受け、国民のためにこれが続ける指導者」⁽⁵⁶⁾であり、「国民との一体化を感じ、国民の運命を自分の目的と結びつける指導者」である。それは、投票用紙で決められるのではなく、信頼にもとづく一致によって決せられなければならない⁽⁵⁷⁾。

こうしてメラーは、左翼に対してマルキシズムの廃棄を要求したのと同じく、右翼に対してはその反動性を捨てよとよびかけ、左右の党派性を越えた、「ドイツ的ソーシャリズム」にもとづく「第三の国」(das Dritte Reich)

という統一的世界観を提起する。かれの代表作『第三の国』は、もともと『第三の政党』という題名がつけられる予定であったが、一切の政治政党を拒否するという姿勢を明確にするために、「六月クラブ」のメンバーの間で討論の末、『第三の国』と改められたものである。だが、「新しい最後の国」⁽⁶⁷⁾（ein neues und letztes Reich）として、積極的にエスカトロギーをもたせて提唱されたこの「第三の国」は、所詮、芸術的魂をもった人間の、政治の世界からはほど遠い美学的夢想である。テーゼ（1、右）——アンティテーゼ（2、左）——ジンテーゼ（3、左右）の弁証法的思考をふまえたこの3という数字が、具体性にとほしい神秘的な数字の魔術であるとすれば、国家（Staat）という政治的概念とは異なる「国」（Reich）という言葉も、神の国（das Reich Gottes）のごとく、政治的概念ではなくして神秘的な宗教的・形而上学的概念である。イエスの「わが国はこの世のものならず」と同様、メラーの「第三の国」も、かれ自身認めているように「現実を超越した世界観思想」⁽⁶⁸⁾である。精神の王国を誇る「文化」⁽⁶⁹⁾から出発したメラーは、精神の原理をそのまま政治にもち込もうとした。「国民化された国民になるためには、超政治化された国民（metapolitisierte Nation）にわれわれはならなければならない」⁽⁶⁹⁾。（傍点筆者）。「国民を精神的に、（geistig）形成することによってのみ、国民は政治的に（politisch）形成される」⁽⁶⁹⁾。（傍点筆者）。メラーにとって、人間の歴史は精神の歴史であり、精神こそ新しい政治や社会・経済秩序を生むものである。メラーは、キリスト教による統一的世界像が崩壊し、分節の境界線があいまいになってゆくウアイマル共和国の空位時代において、キリスト教にとって代る新しい普遍的で統一的世界観を、アマチュア・インテリとして大胆に提示せんとした、アルミーン・モラー（Armin Mohler）のいわゆる「詩人思想家」⁽⁶⁷⁾（Dichter-Denker）に属する。その政治論は、政治論というよりは審美的な「非政治的人間の考察」⁽⁶⁹⁾であり、その説く革命は、政治革命というよ

り「心情の革命」⁽⁶³⁾であった。その一層徹底した行動主義の実践にもかかわらず、この点に関しては、究極においてナチスもまた同じである。ヒトラーにとってもまた、ナチズムは政治運動以上のものであった。「ナチズムを単に政治運動としてのみ理解する者は、これについてほとんどなにも知らぬ者である。それは宗教より以上のものである。それは新しい人間創造への意欲である」⁽⁶⁴⁾。この言葉をヘルマン・ラウシュニング(Hermann Rausing)に語ったヒトラーの出发点も、メラールと同じく、やはり画家という芸術の世界である。ヒトラーは挫折した芸術家であった。かれらの悲劇は、ガイガーのいわゆる「永遠のユートピア」の悲劇であり、ピーター・ビーレック(Peter Viereck)のいわゆる「超政治」⁽⁶⁵⁾(metapolitics)の悲劇であったのである。

- (1) Moeller van den Bruck, Das Recht der jungen Völker, München, 1919, S. 66.
- (2) ebd., S. 15.
- (3) ebd., S. 11.
- (4) ebd., S. 18.
- (5) ebd., S. 19.
- (6) ebd., S. 24, S. 37.
- (7) ebd., S. 50.
- (8) ebd., S. 54.
- (9) ebd., S. 55.
- (10) ebd., S. 99.
- (11) Moeller, *Preußentum und Sozialismus* in Sozialismus und Außenpolitik hrsg. von Hans Schwarz, Verlag Wilt. Gottl. Korn/Breslau, 1933, S. 15.
- (12) Moeller, Das Dritte Reich, S. 22.
- (13) Moeller, *Deutsche Grenzpolitik* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 65.

- (14) Moeller, *Das Dritte Reich*, S. 33.
- (15) ebd., S. 30.
- (16) ebd., S. 212.
- (17) ebd., S. 6.
- (18) ebd., S. 103.
- (19) ebd., S. 26.
- (20) ebd., S. 93.
- (21) ebd., S. 82.
- (22) ebd., S. 70.
- (23) ebd., S. 84.
- (24) ebd., S. 121.
- (25) ebd., S. 110.
- (26) ebd., S. 115.
- (27) ebd., S. 65.
- (28) ebd., S. 47.
- (29) ebd., S. 139.
- (30) ebd., S. 147.
- (31) ebd., S. 151.
- (32) ebd., S. 58.
- (33) Moeller, *Sozialistische Außenpolitik* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 77.
- (34) Moeller, *Das Dritte Reich*, S. 66.
- (35) ebd., S. 35.
- (36) Moeller, *Das Recht der jungen Völker*, S. 28.
- (37) Moeller, *Preußentum und Sozialismus* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 17.

- (88) Stern, S. 268.
- (89) Moeller, Das Dritte Reich, S. 20.
- (90) ebd., S. 160.
- (91) ebd., S. 20 f.
- (92) Moeller, *Vaterland und Mutterland* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 49.
- (93) Moeller, Das Dritte Reich, S. 197.
- (94) ebd., S. 37.
- (95) ebd., S. 188.
- (96) ebd., S. 150.
- (97) ebd., S. 180.
- (98) ebd., S. 181.
- (99) ebd., S. 31.
- (100) ebd., S. 166.
- (101) ebd., S. 168.
- (102) ebd., S. 175.
- (103) ebd., S. 229.
- (104) ebd., S. 180.
- (105) ebd., S. 184.
- (106) ebd., S. 214.
- (107) ebd., S. 247.
- (108) ebd., S. 7.
- (109) Moeller, *Vaterland und Mutterland*, S. 58.
- (110) Moeller, Das Dritte Reich, S. 204.
- (111) Armin Mohler, Die konservative Revolution in Deutschland 1918—1932—Grundriß ihrer Weltanschauungen,

- Stuttgart, 1950, S. 26.
- (32) Sonthheimer, S. 20.
- (33) George L. Mosse, *The Crisis of German Ideology—Intellectual Origins of the Third Reich*, The Universal Library, 1971, p. 310.
- (34) Hermann Rauschning, *Gespräche mit Hitler*, Europa Verlag, 1940, S. 232.
- (35) P・ヴァーレンツ『ロレン派からエトラーへ』西城信訳 紀伊国屋書店 一九七三年 四ページ。

五

メラーの思想形成をうながした個人的な特殊な境遇を別にすれば、かれの思想に決定的に大きな根拠をとどめた世界的事件のひとつは、なんといっても戦争体験である。「朕は、もはやいかなる党派も知らず、ただドイツ人を知るのみ」といういわゆる *Burgfrieden* を意味する開戦劈頭の皇帝の演説が示しているように、一九十四年の体験は、多くのドイツ人にとって、国家がもはや機械的ではなく有機的存在となるような一瞬、国家がもはや外的政治機構としてではなく、民族の内からほとばしり出る一体感として体験されるような瞬間であった。戦争は、ざん濠のゲマインシャフトを促進し、階層や階級の水平化をもたらしした。メラーの「ソーシアリズム」の思想は、平時における大都市生活のなかで得られた思想ではなく、戦場生活のなかからもち帰った、このような共同体思想である。「今や戦争は、新しいバビロンの産業の塔の建物の周辺に総出で集っていた、うごめく大衆を追い散らす。今やそれは、生活に新たな土台をつくり、どんどん上空に向って構築しなければならぬ代りに、広がりにおいて、生活しうる可能性を人間につくり出す。ソーシアリズムもまた、秩序と編成を自覚する。その運

命に直面した民族は、もしただ一階級、……ただプロレタリアートにのみ、その財を与えて、人々にその得るところを得しめないならば、それはいまだソーシアリズムではないということ、欠乏を分つなかつた⁽¹⁾」。(傍点筆者)。社会の垂直化ではなくて水平化を促進し、階層や階級の意味を失わしめることになったこの第一次世界大戦の体験は、敗戦後における賠償やインフレによる中産階層のプロレタリアート化による「われわれは、プロレタリアートの国民と化した⁽²⁾」とのメラの時代認識と相まって、かれにこの「ソーシアリズム」の思想を固めさせることになったのである。

戦争は、水平化や連帯意識をもたらすばかりではない。そこに出現するのは、体験や行動や決断の世界であり、教養や「文化」⁽³⁾の修飾をとり去ったドライで即物的なモンドリアンの絵のような直線的な世界である。ここにおいて、観念の世界になじむ観照的な市民の教養の世界はくずれ、冒険とスリルをもとめるバーバリックなむき出しの生^{レヴェン}や血^{ブルート}が暴発し、安定性に代って、動的運動の不安定なリズムの世界が出現する。「戦争が松明のように町の灰色の壁に燃えあがったとき、だれしもが突然その日々の鎖から立ち切られたような気分になった。よろめき、うろたえながら、巨大な紅潮の波頭にのって、群衆は町へくり出した。……洗練された精神^{ガイスト}、知能に対する愛情こまやかな崇拜は、ガチャガチャ剣の音を立てるバーバリズムの蘇生のなかで崩壊していった」と E・ユンガーも、第一次世界大戦勃発の折の感慨をもらしている。⁽³⁾「精神的本能」としての「悟性」(Verstand)とちがって、主知主義的な「理性」(Vernunft)に従って行動する左翼を、「女々しい売春婦⁽⁴⁾」ときめつけ、「真実で質朴な洞察力と、強烈で男性的な根源的熱情を有し、これに従って行動する意志を有した人間⁽⁵⁾」を賛美して、かつての自己の耽美性と絶縁するかのような姿勢を示すメラの原初的な生への共鳴や、「ドイツ人全体は運動

(Bewegung) に入⁽⁶⁾った」として運動の哲学を宣言し、ゲルマン的な生活空間への動的衝動に共鳴するメラーのダイナミズムもまた、かれが戦場からも帰った十九世紀とは全く異なる生活感覚を示すものである。E・ユンガーが洞察しているように、第一次世界大戦は、その本質において、「十九世紀に対して徹底的に発砲した」ところのものである。十九世紀ブルジョア文明とは全く異質な生活感情を戦場からも帰ったメラーも、やはり、E・ユンガーのいわゆる「市民の居間でキャンブする戦士、小売商店の屋根に仕掛けられた爆薬」の一人であった。その批判にもかかわらず、ドイツ革命とならんで、一九一七年十一月のロシア革命によるソビエトの誕生もまた、メラーの思想に大きな波紋を投げかけた世界的事件のひとつである。アーサー・ケストラー (Arthur Koestler) は、地球にはじめて赤い国が誕生したときの胸のときめきを、「地球があたかもその地軸からもちあげられるような気がした——アルキメデスがその昔夢見ていた離れわざだ」と語っている⁽⁹⁾。しかしロシア革命に衝撃を受けたのは、左翼の側ばかりではない。右翼の方にもその波紋は広がった。バルト沿岸におけるフライコール団のスポークスマン、エルンスト・フォン・ザロモン (Ernst von Salomon) もまた、「辺境の彼方に、不定形ではあるが成長しゆく力が発生している。……われわれは、これをかつは賞賛し、かつは憎む」と述べている⁽¹⁰⁾。H・V・グライヒエン||ルスブルムの主催する「ドイツ学者・芸術家同盟」のメンバーもまた、コミュニケーションには抵抗を感じながらもボルシェビズムには強く魅了された⁽¹¹⁾。エルンスト・ニーキシュ (Ernst Niekisch) の「抵抗サークル」(Widerstand-Kreis)、O・シットラーサーの「黒色戦線」(Schwarze Front)、ハンス・ツォーラー (Hans Zehrer) の「行動サークル」(Tat-Kreis)、H・シュワルツの「近東サークル」(Näher-Osten-Kreis) など、ロシア革命の衝撃を受けて、その思想が東に傾いたサークルである。メラーもまた、その例外ではなかった。

なるほどかれは、ロシアをいまだ「若い民族」ならぬ衝動のままに動く未開の「若い種族」(junge Rasse)であるとし、ポリシェビズムをロシア的ニヒリズムに根ざした「無への試み」と批判している。⁽¹²⁾しかしかれもまた、歴史の重心が西から東の方へ移りつつある実感を隠せない。メラーの「ソーシアリズム」も、いわゆる「ナショナル・ポリシェビズム」(Nationalbolshewismus)へのある種の接近を示すものである。

独ソの提携によって西欧に当るという思想をも「ナショナル・ポリシェビズム」だとするならば、ドイツにおけるその最初の大きな波は、ベルサイユ条約が契機になって独ソ提携への機運がもたらがった時期に起る。外務省における赤い伯爵の異名をもつブロックドルフ・ランツァウ(Brockdorff-Rantzau)伯爵や国防軍におけるハンス・フォン・ゼークト(Hans von Seeckt)将軍らによって、一九二二年のラッパロ条約の締結に帰着する戦術的な独ソ接近の動きがそれである。この時期の人心を代表して中央党議員のファイファー(Pfeiffer)は、「われわれの道は東方に通ずる。……西方への世界は閉ざされており、このことは、われわれにとって、東方の門を叩く義務を意味しているように私には思われる」と述べている。⁽¹⁴⁾

だが「ナショナル・ポリシェビズム」がその頂点に達するのは、フランス軍がドイツの心臓部というべきルール地帯を勝手に占領する一九二三年である。この年の六月二〇日、共産党のカール・ラデーク(Karl Radek)は、共産党インターナショナルの拡大執行委員会の席上で演説し、サボタージュのかどでフランス軍に銃殺された右翼の青年レーオ・シュラゲーター(Léo Schlageter)を、「無への放浪者レーオ・シュラゲーター、……反革命の勇敢な兵士シュラゲーターは、われわれ革命の兵士によって雄々しく重大だと評価されるに価する」ともちあげ、⁽¹⁵⁾ドイツの労働者は右翼のナショナルリストと手を組んで西欧資本主義に当らねばならぬとして、独ソ提携する

「ナショナル・ボリシェビズム」の道を説く。

もちろんメラーは、このラデークの路線をうのみにするわけではない。東西の谷間におかれたドイツ・インテリは、ドイツの生くべき固有の道を求めて苦悩する。かれは、ナショナルリズムがコミュニズムに吸収されてしまうことを恐れて、両者の歩みよりに条件をつける。「ドイツのコミュニズムは、この（西欧に対する）奴隷状態を欲しない。そしてドイツのナショナルリズムもまた、これを欲しない。だが両者が提携できるかどうかの問題がある。その答は、ナショナルリズムの出方にあるのではない。それは、コミュニズムの出方次第だ。ドイツの労働者は、世界革命の希望がますます期待はずれになっていったのはその理由があったということ、そしてその理由は自分自身にあったということ、を明確にしなければならぬ。それは、ドイツ・コミュニズムの（ソビエトに対する）政治的依存性にあったのである」。⁽¹⁶⁾「すべての民族はその固有のソーシアリズムをもつ」とするメラーからすれば、ドイツ方式の「ソーシアリズム」とソビエト方式のソーシアリズムとは全くちがったものである。前者が「団体的」(Corporativ)であるとすれば、後者は「専制的」(autokratisch)である。⁽¹⁷⁾後者の方式は、無秩序な人間と多数の農民を擁したソビエトのようなどころには可能であるが、ドイツのように秩序がゆきとどき、あらゆる階級に教養が浸透し、高度の文明や産業が発達している国では不可能である。このちがいをソビエトが理解しなければ、ソビエトを敵にまわして、われわれはボリシェビズムをライン川どころかワイクセル川でくいとめるであろう。しかし、ソビエトがこのちがいに理解を示すならば、われわれはかれらと手を組んで、西欧に当るのにやぶさかではない、とかれは考える。⁽¹⁸⁾しかし、このような条件づけにもかかわらず、メラーは、基本的にはK・ラデークの路線に賛意を示し、「われわれには東方への方向しか存在し得ぬ。今日なお西方への方向を云々す

る者は、戦争を理解しなかったものである」と述べている。⁽¹⁸⁾このような東方への傾斜を示すメラーの姿勢の背後に、ベルサイユ条約やフランス軍のルール地帯占領に対するかれの怨念と同時に、スラブ系の女性を妻にもち、ドストエフスキーに心酔した過去をもつかれ個人の、政治的動機を越えた東方ロシアへのロマンティックな気持が働いていたことは争えない。いずれにしても、「ドイツ的ソーシャリズム」や「ナショナル・ボリシェビズム」によって象徴されるウァイマル時代の左右混沌、左右が混合する密月現象は、ドイツ革命とともに、赤い国ソビエトの存在を抜きにしては考えられない。

しかし左右混合の現象に拍車をかけたのは、ドイツ革命やロシア革命ばかりではない。それはまた、ジャンルが解体するウァイマル時代の本質的性格にもとづくものである。メラーの思想の背景には、この混沌した時代的狀況がある。

敗戦によって、ドイツは、十九世紀の安定した旧社会秩序とその価値観を決定^{てき}的な形で失うことになった。ウァイマル時代は、混沌、アナキー、不安定、不定形の時代であり、冒険とスリルをもとめて新しい実験を模索する時代、価値の多元化による統一的世界観の空白時代である。特にメラーの生きた一九二〇年代の初頭においては、人々はまだ完全に戦争気分や革命気分から抜け切っていなかった。社会民主党や中央党や民衆党の結成する「国旗党」(Reichsbanner)、共産党の「赤色戦線闘争同盟」(RFB)、ナチスの「突撃隊」(SA)をはじめ、「鉄かぶと団」(Stahlhelm)、「バイキング団」(Wiking)、「高地同盟」(Bund Oberland)、「守り狼団」(Wehrwolf)など、左右をとわずさまざまな軍事組織化された闘争団体が結成され、たがいに市街戦を演じ、テロ、乱闘は日常茶飯事の二〇年代である。この混乱は、予言者の人間が登場する黙示録的気分を用意する。内乱騒ぎの静まらぬ

一九一九年の一月十五日、『赤旗』(Rote Fahne)はカール・リープクネヒト(Karl Liebknecht)の絶叫する言葉を伝える——「経済的崩壊の雷鳴のどろきのなかで、なお眠り続けるプロレタリアート大衆は、最後の審判のラッパによるごとく目ざめさせられるであらう。そしてなぶり殺された戦士の遺体は立ち上り、呪われた者から責任を要求するであらう。今日はまだ火山の地ひびき——明日はそれが爆発し、かれらすべてを燃える灰と溶岩のなかに埋めてしまうであらう」。(20)一九二三年、フランス軍がルール地帯を占領し、インフレが進行して、一九十四年の解放戦争気分にはたった人々が「反対国民運動」(Nationale Opposition)を大々的に展開した年、当時のトゲトゲした人心を南バイエルンの一官吏は証言する——「それ(経済的緊迫)は大衆の気持にはねかえり、かれらは、万人の万人に対する闘争に決着をつけようと、毎日ますますいきり立ち、ますますその気分にはたっている。……憎悪は、特に外国人、外国産業……閭商人、高利貸、そしてまた政府にも向けられ、特に政府に關しては、毎日くりかえされるパンやミルクの物価騰貴の事態をひき起しておいてなにも手を打たないではないか、という見方をしている」。(21)同じ年、メラーもまた、同じような黙示録的気分にとりつかれる——「人間のなかの動物が這いよってくる。アフリカがヨーロッパにおいて暗くたちこめる。われわれは、価値の入口に立つ番兵たらねばならぬ」。(22)

ウィイマル時代のインテリは、こうして、戦前の「文化」の優雅な象牙の塔を脱して、革命、敗戦、混乱、政局の不安定、ベルサイユ条約、インフレといった現実の破局的問題に直面し、積極的にこれにアンガージュしコミットしなければならなかった。そればかりではない。一九二〇年代は、インテリに全く新しい宇宙を開いた。レーニズム、相対性原理、精神分析学、量子力学、ホルモン学、行動主義心理学、パウハウス、表現主義、

シュールリアリズムなどは、いずれもインテリの新しい実験への意欲のあらわれであった。新保守主義も、こうした新しい実験潮流のひとつであったと解することができる。こうしてウァイマル時代は、失なわれた統一的世界観の空白を埋めようとしてメシアニズムに燃えつつ、次から次へと各自思いのままに実験的な発言を試みるインテリの黄金郷となる。かれらの提起する世界観は、たがいに普遍性を競い、優劣を競いあって、激突し、その党派性をむき出しにあらわしてくる。メラーム、左翼に対して、「女々しい売春婦」とか「この知的アホ」といった最低級の軽蔑の言葉を投げつけることにちゅうちょしない。その毒々しいふんい気は、「没価値性」(Wertfreiheit)が示す客観的な科学的エートスの完全な崩壊、十九世紀の文明がもっていた寛容とイロニーの完全な喪失を意味するものであった。芸術の純粹性を政治的党派性から守ろうとしたトーマス・マンも、「自由なる思想を愛することそれ自体、ひとつの関心であり、それは、自己の絶対性を主張し、この愛以上に戦闘的で、これに対しても等しく戦闘性を強要する、他の関心から敵意を受けている」と告白しなければならなかった。⁽²⁴⁾こうした世界観の激突による合理的思考の破綻は、十九世紀の合理主義を否定する反知性主義的な暗示性や、形而上学的な奇跡への信仰に帰着する。メラームはいう——「世界はますます神秘的になってゆく。……占星術は、天文学よりも真理である。錬金術は、化学よりも真理である。形而上学は、物理学よりも真理である」と。⁽²⁵⁾『第三の国』の神話はこうして生れる。

ウァイマル共和国は、その政治体制の立前としては、議会民主主義という十九世紀のブルジョア理念によっていた。だがその中味は、外箱とちがって、水平化された大衆社会、十九世紀とは全くちがった異質な大衆の生活感情が内包されていた。イギリスの報道員セフトン・デルマー (Setton Delmer) によれば、一九二〇年代のベ

ルリンは、セックス、殺人、政治謀反、金、血、秘密、市街戦、超モダニズム、ヒステリー、前衛の画家や音楽家や舞台監督、ティーンエージャーの悪徳クラブの町であり、C・ツックマイヤーによれば、タンゴズボンをはき、鋭くカットされた短いオレンジ色や茶褐色や淡紫色の市松模様の上着を着て、タンゴを踊る闇商人やさぎ師、「ポリシエビキカット」とよばれる黒い角縁メガネをかけ、髪をオールバックにした株屋、髪を男髪にし、膝小僧丸出しの短いスカートをはいた女性が時代の先端をゆくスタイルである。²⁷ ティラー・ガールズ (Tiller Girls)、チャールストン、タンゴ、映画産業やラジオの普及に象徴されるように、男性はシルクハットや燕尾服、女性は長い髪を上で編み、長いスカートを着て、礼節と品位を重んじた、十九世紀の落着いた生活のリズム、十九世紀のみやびやかなサロンのふんい気は消え、テンポの早い、騒々しい野卑な商業文化がこれにとって代る。ロマンティックなバイオリンの時代は消え、ジャズがサキソフォンやトランペットで聞き慣れぬ音楽を奏で出す。イロニーや品位やヒューマン・タッチの喪失を意味する無関心、冷笑、シニシズムは、一九二〇年代全般の風潮である。無慈悲な映画のカメラは、ベルリンの風景やインフレ下にあえぐ日常生活の現実を非情な目で追いまわし、アルフレート・デーブリン (Alfred Döblin) は、「われわれは、いかなる美化も、いかなる装飾も、いかなる様式も、外形的なものにも欲しない」と述べて、²⁸ むき出しの現実を直面する「新即物主義」(Neue Sachlichkeit)を宣言する。内的良心の声に従って行動するD・リースマンのいわゆる十九世紀的「内部志向型パースナリティ」としての個人は消え、「外部志向型パースナリティ」としてタイプ化した大衆が登場し、黙示録的気分が駆られたかれらは、ハーメルンの笛吹きに踊らされるネズミの大量の群のように、追従すべき「指導者」の到来を待ちのぞむ。

こうして十九世紀の理念の上に立つウァイマル共和国の外枠は、そのなかにいつ暴発するか分らぬようなダイナミットの異物を抱え込んでいた。戦場からの帰還兵士、若い世代、零落した中産階層、社会の落伍者、芸術家くずれ、否、大衆感情をもつほとんどもすべてのドイツ人が、この逆機能している「即興的デモクラシー」(improvisierte Demokratie)としてのウァイマル共和国に背を向け、これに対する帰属意識をもたなかった。ウァイマル共和国はほとんどだれにも歓迎されなかった。この政権を支える社会民主党に属するクルト・シューマッヒャー(Kurt Schumacher)ですら、鞭とな⁶³に欠け、無数の憲法違反を不問に付しているウァイマル共和国に不満をぶつつける。こうして、政党間の駆引に明け暮れてなにひとつ決定できず、西欧の顔色ばかり伺っている優柔不断な、旧世界の理念の上に立つウァイマル共和国は、「ディスカシヨンの時代は終った。もはや語られたり書かれたりすることではなく、行為され苦悩されるものが大切だ」というパンス・ボークナー(Hans Bögner)の言葉⁶⁴が示しているように、焦燥に駆られた人々をして、バイタルな行動と決断をもとめる気持に駆りたてる。メラもまた、このような気持に駆りたてられた数多くのなかの一人であったことはいうまでもない。

戦争体験、ソビエトの衝撃、ドイツ革命、戦後の混乱、西欧の押しつけた屈辱的なベルサイユ条約、インフレによる生活苦、大衆社会の出現は、いずれも、ドイツ人にとってひとつの方向を指していた。その方向とは、教養と財産を誇り、理性、進歩、寛容、妥協、中庸、品位、礼節に支えられた安定せる十九世紀ブルジョア文明との決定的な断絶であったのである。

(1) Moeller, Das Recht der jungen Völker, S. 63.

(2) Moeller, Das Dritte Reich, S. 64.

- (7) Jungfer, Werke, Bd. 5, Essays I, S. 38.
- (7) Moeller, Das Dritte Reich, S. 198.
- (10) ebd., S. 227.
- (9) ebd., S. 64.
- (7) Jungfer, Werke, Bd. 7, Essays III, S. 132.
- (8) ebd., S. 114.
- (6) Arthur Koestler, Arrow in the Blue, The Macmillan Company, 1961, p. 64.
- (9) Klemperer, p. 141.
- (11) Schwierskott, S. 139.
- (8) Moeller, Das Recht der jungen Völker, S. 45.
- (9) ebd., S. 104.
- (11) Schwierskott, S. 124.
- (9) ebd., S. 126.
- (9) Moeller, Das Dritte Reich, S. 157.
- (11) Moeller, *Unsere Entscheidung* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 101.
- (9) Moeller, *Sozialistische Außenpolitik* in Sozialismus und Außenpolitik, S. 83 f.
- (11) Moeller, *Unsere Entscheidung*, S. 100.
- (8) Giselher Schmidt, Spartakus—Rosa Luxemburg und Karl Liebknecht, Athenaeon, 1971, S. 161 f.
- (11) Hans Fenske, Konservatismus und Rechtsradikalismus in Bayern nach 1918, Verlag Gehlen, 1969, S. 101.
- (8) Moeller, Das Dritte Reich, S. 245.
- (8) ebd., S. 22.
- (11) Kurucz, S. 56.
- (9) Schwierskott, S. 33.
- (8) Nikolaus von Pregradovich, *Zum Bewußtsein der Zeitgenossen 1924—1929* in Zeitgeist im Wandel, Bd. II, hrsg.

von Hans Joachim Schoeps, Stuttgart, 1968, S. 118.

(27) Zuckmayer, S. 313.

(28) Schröter, S. 80.

(29) Preradovich, S. 117.

(30) Sonthheimer, S. 330.

六

一九二二年、メラーは、「六月クラブ」で当時まだ無名のヒトラーと会っている。R・ペッヒエルがミュンヘンでヒトラーと会見したさい、ペッヒエルがヒトラーに「六月クラブ」での演説を依頼したのがきっかけである。こうして、ヒトラーを招くことに消極的だったメラーの反対を押し切って、「六月クラブ」でヒトラーの演説会が催された。いつもは一二〇人から一五〇人程度の人が集まる会も、当日は三〇人たらずの人しか出席しなかったといわれる。その折、ヒトラーは、「あなたは私に欠けているすべてのものをもっておられる。あなたは、ドイツ革新のための精神的な道具立てをしておられる。私は、鼓手や召集者にすぎません。われわれをお仲間に入れて下さい」と、辞を低くしてメラーをもちあげた。⁽¹⁾ 会が終ると、ヒトラーは軍隊式に歩調をとるような恰好で足早に立ち去っていった。その後姿を見ながらメラーは、ペッヒエルに向って、「^{デァルル}ペッヒエル、あいつにはなにも分っていないのさ」(F・スターンの注釈によれば、さらにこの言葉の後に、「³こんな男に事務所で会うくらいなら、自殺した方がましだ⁽²⁾」というメラーの言葉が続く)、とつぶやいたといわれる。⁽³⁾ ヒトラーが一九二三年十一月に起したミュンヘン暴動に対しても、メラーは、きわめて批判的で、これを「愚

かきの犯罪」とよび、「ヒトラーは、そのプロレタリアートの幼稚さの故に挫折した。かれは、そのナチズムを精神的に基礎固めすることを理解していなかった。かれは情熱の化身ではあったが、全く距離と目測をもたなかった」ときめつけている。⁽⁴⁾（傍点筆者）。

このメラーに対して、ゲベルスは、一九二五年メラーが亡くなった後のかれの日記のなかで記している——「メラーの『第三の国』の書物をふたたび静かに読む機会をもった。……かれは、われわれ若者がつとに感情と本能から知っていたすべてのことを書いている。なぜメラーは、なぜ『輪』と『良心』は、最後の結論を出さぬのか？　なぜわれわれと一緒に闘争しないのか？　精神的救済だ、って？、否、白兵戦だ。……政治的美学はもうたくさんだ」。⁽⁵⁾（傍点筆者）。それでもナチスは、当分の間はメラーを祭りあげていたが、やがて権力獲得後、その機関紙『民族観測者』（Völkischer Beobachter）で、非公式ながらメラーをナチスの草分けにあらずとし、ついに一九三九年、党は公式にメラーの思想は反動であってナチズムではないとして、これを葬り去ったのである。

E・G・グリュンデル（Gründel）の指摘したように、^{ドイツ社会主義者}統制化をおし進めてゆくナチス政権にとって、ナチスの指導者でないのももちろん、助言者でもないし、その追随者でもないインテリの存在は、甚だやっかいな存在であった。⁽⁶⁾メラーはナチスが政権をとる八年前に亡くなっているが、上に述べたかれとナチスとの行きちがいは、ナチスの圧迫を受けた多くのインテリが辿った悲劇的な運命をメラー自身も辿ったであろうことを予想させるものである。なるほど、メラーとナチズムとを結びつける思想は多い。反ベルサイユ条約、反西欧ヒューマニズム、反ウアイマル共和国、ナシヨナリズム、十九世紀からの断絶、反マルキシズムの「ソーシアリズム」、

闘争的世界観は、両者に共通して見られる要素である。この意味で、メラーの思想はたしかにナチズムにつながるものをもっている。けれども原理的に考えれば、ナチスとメラーとは、その存在において相入れぬものをもっていたといわねばならない。

メラーは、インテリであつて政治家ではない。世界観の提供者であつて実践家ではない。いかにかれが政治の世界への転向を試みたといつても、究極においては、精神ガイストの世界に生きるA・ケストラーのいわゆる「ヨギ」であり、上から政治家や大衆に向つて号令をかけようとする高姿勢をもつた精神貴族であり、世界観の提供者としての特権階級的存在にとどまろうとし、その政治活動も、政党とは無関係な独立したサロンの閉鎖性を帯びる。

これに反してナチスは、「私は諸君と同じ労働者だ」というロバート・ライ(Robert Ley)の言葉が象徴しているように、特権階級(7)の存在を一切認めぬ「庶民」(common man)の時代を招来した水平化をおし進める組織化された大衆運動であり、ひたすら政治路線をつつ走る鉄の紀律をもつた政治政党であつた。ナチス以外の特権階級(8)の存在を一切認めぬかれらが、インテリ狩りをおこなつて、インテリの独立帝国をつぶしにかかったのは当然である。ナチスにとって、思想は権力政治のための道具にすぎない。H・ラウシュニングの指摘するように、ナチスは、インテリのように一定の世界観にもとづいた政治を志向するものではなく、「世界観を使つて」(mit einer Weltanschauung)政治をおこなう、世界観を権力政治のために利用する「オポチュニズムの政治」(Gelegenheitspolitik)である。かれらにとっては、精神的価値は、自己目的ではない。ナチスは、究極においてはやはり審美的体質を具えていたにもかかわらず、徹底的に精神ガイストの世界を離れて政治マハットの実践世界に徹する姿勢を示そうとするA・ケストラーのいわゆる「コミッサー」である。「私は、人間を、自己目的化した精神ガイストの強制から解放し、良心

や道徳とよばれるキメラの汚らわしい低俗な自己責め苦から解放する」とヒトラーも述べている。⁽⁹⁾ 行動主義を徹底的に実践しようとするナチズムからすれば、インテリは、思想や世界観をもてあそぶ行動力を欠いたひ弱な文士に過ぎない。メラーが神格化し、ナチスがその表看板に利用した「プロシア的ソーシアリズム」ですら、ヒトラーの真意からすれば、「本能を欠いた文士一派の誤れる、国家主義を越えた、頭脳からのみ生れた」⁽¹⁰⁾ 文人による一篇の作文に過ぎなかった。この思想や世界観に対する徹底した軽蔑は、ナチスをバーバリズムにみちびく「しかり、われわれは野蛮人だ。われわれはそうありたいと願う。それは名譽の称号だ」とヒトラーは豪語する。⁽¹¹⁾ なるほど、メラーもまた、バーバリックな原初的な生を賛美した。しかしメラーが所詮は観念のバーバリヤンにとどまったのに反して、ナチスは実践のバーバリヤンであった。「行動サークル」(Tat-Kreis)に属していた一人エルンスト・ウィルヘルム・エシュマン(Ernst Wilhelm Eschmann)は、ナチスについて無知であった過去のものの非を述懐している——「われわれのナチズム評価は完全にまちがっていた。われわれは、この運動もっている実際の力についてなにも知るところがなかった。われわれは、これらの人々がそれほど知的ではないと考え、知性こそ政治において大切なのだという風に考えていた」⁽¹²⁾。もしメラーがナチス政權獲得の後も生きていたら、かれもまた、このエッシュマンの苦い悔恨の言葉を吐いていたことであろう。国内亡命の形（たとえばO・シュペングラーのように）であれ、国外亡命の形（たとえばO・シュトラサーのように）であれ、肅清の形（たとえばE・ユンクのように）であれ、メラーもまた、A・モーラーのいわゆる「ナチズムのトロツキストたち」⁽¹³⁾の悲劇的な運命を味わっていたことであろう。

- (1-) Schwierskott, S. 144.
- (2) Stern, p. 237.
- (3) Schwierskott, S. 144.
- (4) ebd., S. 145.
- (5) ebd., S. 149.
- (6) Kurucz, S. 154.
- (7-) Richard Grundberger, A Social History of the Third Reich, Weidenfeld and Nicolson, 1971, p. 28.
- (8) Rauschnig, Die Revolution des Nihilismus — Kulte und Wirklichkeit im Dritten Reich, Zürich, 1938, S. 43.
- (9) Rauschnig, Gespräche mit Hitler, S. 212.
- (10) ebd., S. 125 f.
- (11) ebd., S. 78.
- (12) Sonthmeier, *Der Totkreis* in Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, 7 Jg., 1959, S. 256.
- (13) Mohler, S. 12.